

☆受難の主日(3月24日)の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

主の入城の福音朗読 (マルコ 11章 1-10節)

一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」二人は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、それをほどいた。すると、そこに居合わせたある人々が、「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。二人が、イエスの言われたとおりに話すと、許してくれた。二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ホサナ。主の名によって来られる方に祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に祝福があるように。いと高きところにホサナ。」

第一朗読 (イザヤの預言 50章 4-7節)

主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え疲れた人を励ますように言葉と呼び覚ましてくださる。朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし、弟子として聞き従うようにしてくださる。主なる神はわたしの耳を開かれた。わたしは逆らわず、退かなかった。打とうとする者には背中をまかせひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。主なる神が助けてくださるからわたしはそれを嘲りとは思わない。わたしは顔を硬い石のようにする。わたしは知っているわたしが辱められることはない、と。

第二朗読（使徒パウロのフィリピの信徒への手紙 2章 6-11節）

イエス・キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

主の受難の朗読（マルコ 15章 1-39節）

夜が明けるとすぐ、祭司長たちは、長老や律法学者たちと共に、つまり最高法院全体で相談した後、イエスを縛って引いて行き、ピラトに渡した。ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と答えられた。そこで祭司長たちが、いろいろとイエスを訴えた。ピラトが再び尋問した。「何も答えないのか。彼らがあのようにお前を訴えているのに。」しかし、イエスがもはや何もお答えにならなかったため、ピラトは不思議に思った。

ところで、祭りの度ごとに、ピラトは人々が願い出る囚人を一人釈放していた。さて、暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒たちの中に、バラバという男がいた。群衆が押しかけて来て、いつものようにしてほしいと要求し始めた。そこで、ピラトは、「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」と言った。祭司長たちがイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。祭司長たちは、バラバの方を釈放してもらうように群衆を扇動した。そこで、ピラトは改めて、「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」と言った。群衆はまた叫んだ。「十字架につけろ。」ピラトは言った。「いったいどんな悪事を働いたというのか。」群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び立てた。ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

兵士たちは、官邸、すなわち総督官邸の中に、イエスを引いて行き、部隊の全員を呼び集めた。そして、イエスに紫の服を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、「ユダヤ人の王、万歳」と言って敬礼し始めた。また何度も、葦の棒で頭をたたき、唾を吐きかけ、ひざまずいて拝んだりした。このようにイエスを侮辱したあげく、紫の服を脱がせて元の服を着せた。そして、十字架につけるために外へ引き出した。

そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。そして、イエスをゴルゴタという所 — その意味は「されこうべの場所」— に連れて行った。没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはお受けにならなかった。それから、兵士たちはイエスを十字架につけてその服を分け合った、だれが何を取るかをくじ引きで決めてから。

イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ。」同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒に、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。

昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

「春は名のみ風の寒さや」という歌の歌詞が今の時期を表しています。桜の花も今が良いか、もう少しかと自問自答しているようですね。でも季節はいつの間にか受難の主日を迎えました。「棕櫚(ソテツ?)の葉を手にもって」と歌う行列も、季節を知らせるものでもあります。イエスを熱烈歓迎した群衆はいつの間にかイエスを「十字架に付けろ!」と叫ぶ集団になっていました。人間の心変わりの速さが恐ろしいですね。その時私だったらどこにいるでしょうか。

主の入城の福音朗読 (マルコ 11 章 1-10 節)

イエスのエルサレム入場を大歓迎する人々。イエスは子ロバにまたがってエルサレムに入ります。ここでは人々の幻想がイエスを歓迎していたのです。イエスをユダヤの王として担ぎ出そうとする幻想でした。政治的なにおいがする群衆でした。イエスは人々の期待する幻想を感じながらご自分の使命を遂行しにエルサレムに向かわれたのです。このままでは自分の行動が理解されないという思いに駆られながらの入場だったでしょう。

第一朗読 (イザヤの預言 50 章 4-7 節)

救い主メシアに関する預言が読まれます。イエスは必死の思いで父なる神から託された使命を果たそうとします。イエスは御父から託された使命を果たそうと意気込む心がある一方、人として辱めや体の痛みに絶望的なまてになられます。私たちが生涯の中で苦しみ喘いでいる姿がイエスの中にあるのです。苦しむ人間の痛みをイエスはご自分のものとされたのです。

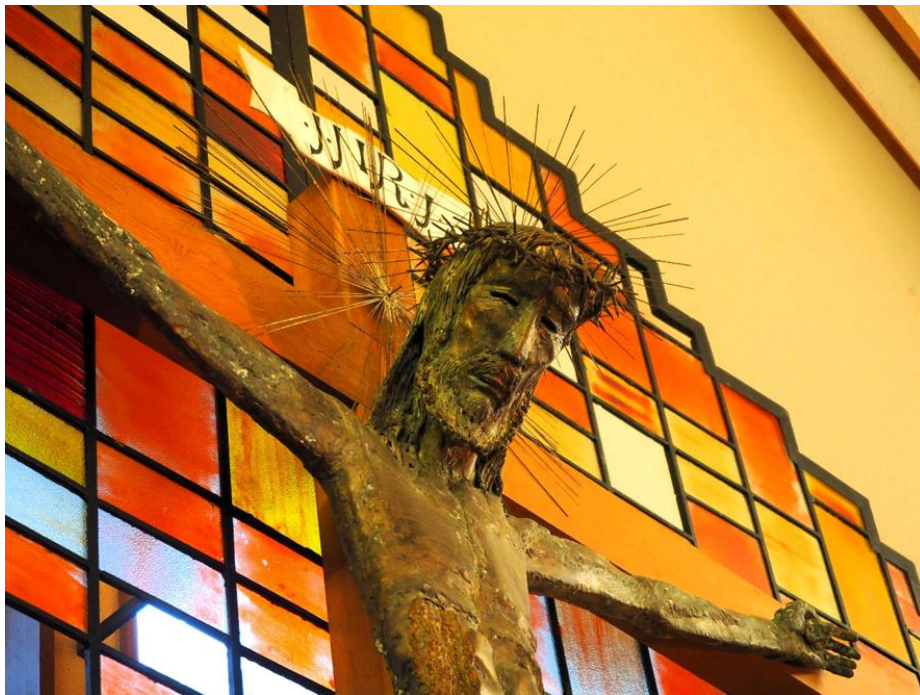
第二朗読 (フィリピの信徒への手紙 2 章 6-11 節)

徹底的にご自分を無にされ、へりくだられたられたイエスの姿をパウロは記しています。この個所は初代教会のキリスト賛歌が引用されていると言われています。初代教会の人々はイエスのへりくだりにとても恐れ多いこと

と感じていたのでしょうか。十字架の死に至るまでの従順。ひとりでも多くの人々を神の国に迎え入れたい御父の心を察してのイエスの決死の受難なのです。

主の受難の朗読（マルコ 15 章 1-39 節）

この受難の朗読はできるだけ実感が持てるように「群読」という朗読方法が取られます。「十字架に付けろ。十字架に付けろ。」と叫ぶ群衆。つい先ほどまではイエスを熱烈歓迎していたのですが…。自分の損得に敏感な人間たち。本当の幸福はイエスを信じることにあるのに、目先の利益に右往左往する人間。イエスの目には「そっちじゃないよ！」というもどかしさがあったでしょう。でもマルコは人間はまだ捨てたものではないということを示したかったのでしょう。朗読の最後にこう書き記しています。ローマ兵の百人隊長が「本当に、この人は神の子だった」とつぶやいたのです。



池田宗弘作「十字架上のイエス」野尻湖教会（2023年7月）

PS

今週は聖週間です。聖木曜日はご聖体の制定、司祭職の制定、洗足式などがあります。聖金曜日は荘厳共同祈願、十字架の礼拝があります。聖土曜日はイエス・キリストが墓に葬られたことを記念するので基本的には何の儀式

もありません。ただ夕方つまり典礼上では明日の日曜日が始まるころに、復活を祝う復活徹夜祭が荘厳に行われます。このような日々の流れから復活を迎える典礼の日は典礼祭儀の頂点とも言われています。みんなで参加しイエス・キリストの復活をお祝いいたしましょう。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光